日中交流サークルの話し合いにおける調整行動
−日本語接触場面と日本語母語場面の比較分析−

丁 一然（東京外国語大学大学院生）

1. はじめに

会話をする際，相手の年齢，性別，社会的地位等，参加者が持つ様々な属性により，言語行動や非言語行動を調整する必要がある．特に，母語話者と非母語話者が参加する接触場面では，母語話者が言語ホストとなって，非母語話者に調整行動を多く用いると考えられる（ファン，1998）．そして，部活やサークル等のコミュニティで何かを決めるために行う話し合いでは，参加者たちが自分の知識・技能の変化，周りの環境の変化，参加者自身の自己理解の変化を起こしながら，コミュニティで担う役割も変化させており（高木，1999），調整行動もより複雑になると言える．

そこで，本研究では，日中交流サークルといったコミュニティのメンバーが 2 回のイベントを企画する日本語での話し合いを分析対象とし，母語場面と接触場面での調整行動を比較分析する．

2. 先行研究

ファン（1998）によると，接触場面においては，言語能力によって役割が決まることが多く，母語話者が言語ホスト，非母語話者が言語ゲストの役割を担いやすいという．そして，言語ホストは主に会話維持をするための調整として，自己参加の調整，および他者参加の調整を行うとしている．自己参加の調整には，＜参加増進ストラテジー＞（例：話題の展開をコントロールする），および，＜参加緩和ストラテジー＞（例：自分の発話を言い換える）があるという．一方，他者参加の調整には，＜参加要請ストラテジー＞（例：静かな参加者にターンを与える），および，＜参加支援ストラテジー＞（例：相手の発話を確認する，誤用を許容する，相手の発話を言い換える）があるという．

それに対して，言語ゲストは主に会話においてその場をしのぐための調整として，自己参加の調整，および他者参加の調整を行うとしている．自己参加の調整には，＜参加回避ストラテジー＞（例：文法的な縮小，語彙の簡略，話題全体の回避），および，＜参加達成ストラテジー＞（例：直接翻訳）があるという．一方，他者参加の調整には，＜支援懇請ストラテジー＞（例：言語行動・非言語行動で助けを求める），および，＜参加譲渡ストラテジー＞（例：渡された話順を放棄する）があるという．

3. 研究方法

本研究では，日中交流サークルのメンバーがイベントを企画する対面での話し合いを分析対象とした．本サークルは，日本語と中国語の相互学習と交流を目的とする学生団体であった．話し合いは，2022 年 3 月に接触場面と母語場面で各 1 回行い，それぞれ夏休みに行う予定のイベント①とイベント②を企画することを目的とし，イベントのテーマや開催場所，進め方などを決めるものであった．メンバーの都合により，まず，接触場面の話し合いが行われ，その約 2 週間後に母語場面の話し合いが行われた．両場面の話し合いの間に以前企画したイベント X が行われた．

企画の話し合いを行うメンバーは，部長の J1（学部 2 年生・日本人），元部長の J2（学部 3 年生・日本人），部員の J3（学部 3 年生・日本人），および C（大学院 2 年生・中国人）であり，J1 と J2 が両場面とも参加した（表1）．なお，C の滞日歴は 2 年で，日本語能力が N1 レベルであった．J1 は週に 5 回程度，J2 は月に 1 回程度非母語話者と接する機会を持っていた．各話し合いは 30〜40 分程度で，全て録画した．その後，各参加者に対し，個別に話し合いの録画ビデオを見せながらフォローアップ・インタビュー（FUI）を行い，発話の意図などを確認した．これらをもとに，参加者の言語行動，非言語行動，会話への参加の仕方等に着目し，母語場面と接触場面での調整行動を比較分析した．

表1　話し合いの参加者（接触場面，母語場面）

場面	収集時期	企画内容	参加者		
接触場面	3 月 13 日	イベント①	J1（部長・学部 2 年生）	J2（元部長・学部 3 年生）	C（部員・大学院 2 年生）
3 月 19 日イベント X 実施					
母語場面	3 月 24 日	イベント②	J1（部長・学部 2 年生）	J2（元部長・学部 3 年生）	J3（部員・学部 3 年生）

なお，話し合いの過程については，大浜(2000)を参考に，「①テーマ導入」，「②提案するための交渉（交渉 A）」，「③提案」，「④提案に対する交渉（交渉 B）」，「⑤合意形成」に分けて示すこととする．

4. 分析結果

接触場面と母語場面の話し合いを分析した結果，(1)話し合いでの言語に対する調整行動（意味，言葉の使い方）の相違点，および，(2)話し合いにおける自身の役割に対する調整行動の共通点が見られた．以下，会話例をもとに詳述する．まず，(1)についてはファン（1998）の言語ホスト，言語ゲストによる調整行動をもとに述べ（4．1），(2)については高木（1999）のコミュニティで担う役割を参考にした調整行動の観点から述べる（4．2）．

4.1 話し合いでの言語に対する調整行動

4.1.1 意味に関する調整行動（言い換え，直接翻訳）

接触場面では，非母語話者が日本語の語彙を理解しやすくなるように，母語話者がもう一人の母語話者の発話を言い換えるといった言語ホストとしての調整行動を行っている様子が見られた．一方，非母語話者には，自身が言おうとすることを中国語で直接翻訳するといった言語ゲストとしての調整行動が見られた．だが，このような日本語の意味に関する調整行動は，母語場面では見られなかった．

まず，会話例1（接触場面）は，イベント①の開催場所を決めている例である．ここでは，563 で J1 がイベントの開催場所として「オリセン」を提案したのに対し，J2 が 564 で「オリセン」と繰り返して確認した後，567 で「オリンピックセンター」と言い換えて情報提供している．この部分について FUI によると，J2 は非母語話者である C が「オリンピックセンター」という場所自体だけでなく，その略称の「オリセン」が理解できないと予想したため，「オリンピックセンター」と言い換えたのだということである． これは，母語話者 J2 の言語ホストとしての＜参加緩和ストラテジー＞による調整行動であると言える．

会話例 1 接触場面【 イベント①の開催場所を決める 】J2 の＜参加緩和ストラテジー＞

563 J1: オリセン	③提案	情報提供	
564 J2: オリセン	④交渉 B	確認	
565 C ：www	笑い		
566 J1: 安い，安いから，あとまあ，割と，まあ取るのがちょっと，なんか電話したりするの面倒くさいですけど，まあ安いので，オリセン，はいいか	③提案	情報提供	
567 J2: オリンピックセンター	④交渉 B	情報提供	＜参加緩和ストラテジー＞

会話例 2（接触場面）は，イベント①のテーマを決めている例である．ここでは，J2 と J1 が 以前の話し合いでテーマを選んでいる際に，「方言」のようなテーマでイベントをしたら参加者による一方的な説明になってしまうため，交流にならないという意見が出たことを振り返っている．これに対して，C は 180 で方言をテーマにする際も参加者に条件を課すべきだということを述べようとし，「条件」の意味で「要求」と述べている．これは，非母語話者 C が母語である中国語の「要求」を日本語に直接翻訳して伝えようとする，言語ゲストとしての＜参加達成ストラテジー＞による調整行動であると言える．だが，こうした少し不自然な日本語に対して，J1 と J2 は訂正をすることもなく，そのまま会話を続け，「誤用を許容する」という言語ホストの＜参加支援ストラテジー＞による調整行動を行っている．FUI によると，J2 は，この部分について C の言葉遣いが不自然であると感じたものの，それを一々指摘すると，J1 に細かいと思われる可能性があるため，そのまま会話を続けたということである．

会話例 2 接触場面【 イベント①のテーマを決める 】
C の＜参加達成ストラテジー＞と J2 の＜参加支援ストラテジー＞

172 J2: なんかテーマ選びの時に:なんか例えば:その方言っていうのが 1 個 1 回出てきたけど，それがテーマにならなかったのは:なんか:方言について話すんだとしたら:交流じゃなくて，なんかあの:	②交渉 A	情報提供	
173 C: 方言		確認	
174 J1: あ，一方的な		情報提供	
175 J2: そう，一方的な		あいづち	
176 J1: 説明になっちゃうから，		情報提供	
177 C: あ::		あいづち	
178 J2: だから交流にはならないから:みたいなことになったから		情報提供	

179 J1: あ::		あいづち	
180 C: 方言にもなんか，参加者に対するうんちょっと要求があるんじゃないですか		同意要求	＜参加達成ストラテジー＞
181 J2: ああ，そうですね		同意	＜参加支援ストラテジー＞

4.1.2 言葉の使い方に関する調整行動（相手の言葉の言い換えによる確認）

接触場面では非母語話者が用いた言葉を言い換えて確認している様子が見られたが，同じ言葉が使われている母語場面ではこうした言い換えによる確認が見られなかった．

まず，会話例 3(接触場面)は，イベント①のテーマを決めている例である．ここでは，3 人が以前行ったイベントを思い出しながら，今回のテーマについて話し合っている．C が 043 で「日中のりゅうこう」と述べたのに対して，J1 が 047 で，「はやり:みたいですよね」と言い換えて確認している．その後，C も 048 で「はやり」と言い換えて発話を続けている．FUI によると，J1 は，この部分について，漢語の「りゅうこう」より，和語の「はやり」の方がわかりやすいと思ったため，「はやり」と言い換えながら，以前のイベントのテーマを C に確認したということである．これは，母語話者 J1 の言語ホストとしての＜参加支援ストラテジー＞による調整行動であると言える．

会話例 3 接触場面【 イベント①の テーマを決める 】 J1 の＜参加支援ストラテジー＞

043 C：でその前も:まあ，日中のりゅう，りゅうこう	②交渉 A	情報提供	
044 J2: うん		あいづち	
045 J1: うん		あいづち	
046 C：まあ，その:		情報提供	
047 J1: はやり:みたいですよね		確認	＜参加支援ストラテジー＞
048 C：そう，はやり:なんですよ		情報提供	
049 J2: うんうんうん		あいづち	
050 C：あれって，ちょっとテーマが大きすぎて，逆に話しにくく，はなったと		情報提供	

一方，会話例 4(母語場面)は，イベント②のテーマを決めている例である．ここでは，J3 が 310 で「今りゅうこうの，物とか言ったり」と提案しているが，J1 は会話例 3 の接触場面のように言い換えて確認するのではなく，311 で「うん，そうですね」とあいづちで同意を表すだけであった．FUI によると，J1 は，この部分について，和語のほうがわかりやすいと感じていたものの，「りゅうこうのもの」というのはタイトルのように一つのまとまりがあり，特に違和感を持たなかったため，「はやり」という和語に言い換えをして確認をしなかったということである．

会話例 4 母語場面【イベント②のテーマを決める】J1 の調整行動なし

308 J3:あと食事？	③提案	情報要求	
309 J1:はい	④交渉 B	同意	
310 J3:それぞれの地方のものとか，今りゅうこうの，ものとか言ったり，それから学校生活の違いとかでテーマ大きく 3 つくらい決めて，3 つくらい今したから，この中から選んでもらって	③提案	情報提供	
311 J1:うん，そうですね	④交渉 B	あいづち	調整行動なし

4.2 話し合いにおける自身の役割に対する調整行動

接触場面と母語場面の両場面とも，日中交流サークルといったコミュニティのメンバーとして，相手の参加の仕方，自分の知識・経験の変化等により，話し合いにおける自身の役割を調整する様子が見られた．

まず， 接触場面では，C の話し合いにおける自身の役割の調整行動が見られた．この接触場面の話し合いで，最初 C は主導権を母語話者に任せようとしていたが，J1 と J2 が互いに頼り合いすぎて，話し合いが停滞していた．そのため，C が話し合いの途中から自ら提案したり意見をまとめたりして，話し合いを積極的に進める役割を担うようになる様子が見られた．

また，接触場面と母語場面の両場面に参加した J1 にも，話し合いにおける自身の役割の調整行動が見られた． J1 は，1 回目に参加した接触場面では，話し合いに参加するのが初めてであったため，意見があまり言えなかったということである．だが，2 回目に参加した母語場面では，1 回目の接触場面の話し合いとその直後にあったイベント X の経験をもとに，自身の意見を述べたり，他の参加者の意見を発展させたりする役割を担うようになる様子が見られた．

会話例 5(接触場面)は，イベント①の進め方を決めている部分である．ここでは，C は 269 と 271 でイベント①を対面でやってただ喋るだけでは意味がないという意見を積極的に述べている．一方，J1 は昔のイベントではどのようなことをしていたのか，経験者の J2(元部長)に情報要求し，自身の意見は述べていなかった．

会話例 5 接触場面【 イベント①の進め方を決める 】 意見を積極的に述べる C，情報要求のみする J1

269 C：でも対面でやるとただ喋るだけじゃ:	③提案	同意要求
270 J1: そうですね	④交渉 B	同意
271 C：意味ないじゃないですかｗ	③提案	同意要求
272 J1: なんか別にプラスして，あのなんかあった方がいいですよね	③提案	同意要求
273 C：はい	④交渉 B	同意
274 J1: なんか昔その本会期とかやってた時って，そう，交流の時に:なんか，どう，例えば一緒になんか，作るとか，物作るとか	②交渉 A	情報要求
275 J2: えーと，た，えーと，自分らの時は:なんか，えーと，なんだっけ	②交渉 A	情報提供

一方，会話例 6(母語場面)は，イベント②の進め方を決めている部分である．ここでは，J1 は前回参加したイベント X での経験を踏まえて，次回のイベント②の進め方に関する情報提供をしながら，自身の意見を展開していく様子が見られる．

会話例 6 母語場面【 イベント②の進め方を決める 】意見を積極的に述べる J1

379 J3:したらまあ 14 時くらいから，え:，まあ，16 時ぐらいまで，2 時間ぐらい喋ってもらって，	③提案	情報提供
380 J1:そうですね	④交渉 B	あいづち
381 J2:うん	④交渉 B	あいづち
382 J3:お話してもらって，で，え，まとめは，皆の前でそれぞれ	③提案	情報提供
383 J1:皆の前であのそれぞれその作った物を見せながら，なんか，その話してる間に，紹介の言葉，文も考えておいて，	③提案	情報提供
384 J3:はいはいはい	④交渉 B	あいづち
385 J1:それで	③提案	情報提供
386 J3:発表	③提案	情報提供
387 J1:あの見せながら発表していく感じです	③提案	情報提供
388 J3:発表が 16 時から 17 時	③提案	情報提供
389 J1:まあなんか，全部暗記するの難しいので，大体こう見ながらだったんですけど	③提案	情報提供

5. 考察と結論

以上，本研究では，日中交流サークルのメンバーが 2 回のイベントを企画する日本語での話し合いを分析対象とし，母語場面と接触場面での調整行動を比較分析した．その結果，コミュニティの話し合いでの調整行動について，接触場面と母語場面の相違点・共通点が明らかになった．

まず，相違点として，接触場面では母語場面より母語話者の言語の調整行動が多く行われ，それはもう一方の母語話者の存在や行動に影響されやすいことが挙げられる．共通点としては，母語場面と接触場面とも，相手の参加の仕方，自分の知識・経験の変化等により，参加者が話し合いでの自身の役割を調整しながら参加していることが挙げられる．

ここから，サークル等のコミュニティにおける話し合いでは，接触場面での母語話者 2 名相互による言語の調整行動，および，話し合いでの自身の役割の変化に応じた調整行動の必要性が喚起される．

今後は，非母語話者がサークルなどのコミュニティに参加する際に，言語および話し合いにおける自身の役割をどのように変化させていくのかについて，縦断的に調査していきたい．

参考文献

大浜るい子(2000)．日本人学生と外国人学生における合意形成過程の比較 広島大学日本語教育学科紀要，10，65-71．

高木光太郎(1999)． 正統的周辺参加論におけるアイデンティティ構築概念の拡張 東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要，10，1-14．

ファン・サウクエン(1998)． 接触場面における言語管理 国立国語研究所日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成研究会発表原稿・会議要録，1-16．